

フォーラム概要

相聞対論

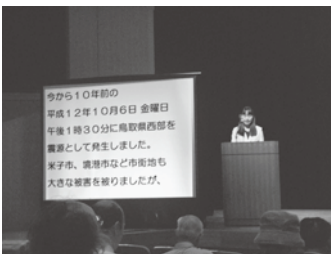
「鳥取県西部地震の教訓とこれからの地震対策について」
「中山間地域の地震対策を考える」



10月6日 相聞対論 (米子市文化ホール)



○司会



皆様、お待たせいたしました。只今より、「鳥取県西部地震から10年目フォーラム」を開

会いたします。私は、本日の司会進行役を務めさせていただきます鳥取県の田中奏子と申します。よろしく願いいたします。本日のプログラムはお手元の白封筒にございますのでご確認下さい。開会にあたりまして、このフォーラムを一言で説

明させていただきます。

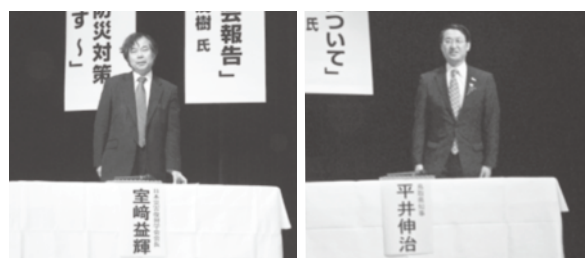
鳥取県西部地震は、今から10年前の平成12年10月6日金曜日午後1時30分に鳥取県西部を震源として発生しました。米子市、境港市など市街地も大きな被害がありましたが、日野町など、中山間地域が深刻な状況に陥ったのが、この地震の特徴の一つでした。そこで、本フォーラムでは、鳥取県西部地震から10年目を迎えるにあたり、中山間地域での地震防災対策、復興、被災地への支援などについて考えることを目的としております。開催にあたりましては、鳥取県だけでなく、関西学院大学災害復興制度研究所や日本災害復興学会の皆様と一緒に取り組み、その成果を全国に発信していきたいと考えております。

本日、内閣府の防災担当の政務官からメッセージが届いておりますので、読み上げさせていただきます。『鳥取県西部地震から10年目フォーラムに寄せて』この地に大きな被害をもたらした鳥取県西部地震の発生から10年の歳月が経過いたしました。10年前のこの日、最大震度6強という強い揺れが中山間地域を襲ったこの震災に際し、負傷された方、住宅の損壊に見舞われた方など、被災者の皆様のご苦難に思いをいたすと心が痛みます。一方で、地元の方々を始めとする関係者のご努力により被災地は力強く復興を遂げており、被災地の皆様のご尽力に心より敬意を表します。本日、震災から10年を迎えるにあたり、当時現場で奮闘された関係者の1人である平井知事さんも交えて本フォーラムが開催されることは大変有意義であると存じます。地元住民の方々や全国の研究者やボランティアの方など、様々な分野の多様な知識、経験が結集され、震災時の経験や教訓が鳥取県から広く全国に発信されることを期待いたしております。地震はいつ何時どの地域を襲うとも限りません。今年も海外では大地震や風水害による甚大な被害が発生し、災害対策の重要

性を再認識しているところです。私も防災担当の大臣政務官として、これら自然災害に対する減災の取り組みを始め、総合的な防災対策を積極的に推進し、国民が安心して暮らせる社会の実現に全力を挙げて参ります。平成22年10月6日、内閣府大臣政務官防災担当阿久津幸彦「以上、ご披露させていただきます。さて、本フォーラムは昨日から開催されております。昨日は、日野町で防災教育に取り組む小学生、研究者、教員の方から防災教育の取組発表が行われました。次に、公開車座座談会として、阪神・淡路大震災以降、ここ15年の間に発生した各被災地から、大学研究者、復興リーダー、実務家、自治体職員らが集い、過疎・高齢化が進む中山間地域の防災・復興のあり方について体験の継承や意見交換が行われました。本日は、ここ米子市へ会場を移し、平井鳥取県知事、室崎日本災害復興学会会長による相聞対論、山中関西学院大学教授による昨日の結果報告、そして、午後からはそれらを踏まえての中山間地域におけるこれからの防災対策についてのパネルディスカッションを予定しております。それらに入ります前に、皆様に鳥取県西部地震がどのような地震であったかを振り返っていただくため、まずVTRを約5分間ご覧いただきたいと思っております。なお、VTRで出てまいります最初の場面は、今からちょうど10年前、当会場の隣の米子コンベンションセンターで開催されていた介護保険推進全国サミットにおける地震発生時の様子です。また、西部地震の概要・特徴などの説明については、当時鳥取大学工学部教授でありました西田良平先生がお話をされています。それではご覧ください。(VTR) いかがでしたでしょうか？10年前の出来事が思い返され、鳥取県西部地震がどのような地震であったのか、皆様にその概要とイメージをお伝えできたのではないかと思います。

それでは、これより相聞対論を始めさせていた

できます。相聞対論とは、舞台の上に平井知事と室崎会長のお二人が対峙するような形で座り、まず平井知事から本題として鳥取県西部地震の総合的な話をしていただき、室崎会長から、いわば返歌として中山間地における災害復興への思いを語っていただくものであります。それでは相聞対論をしていただく方にご登壇していただきます。平井知事、室崎会長様、ご登壇をお願いいたします。



それでは、ご紹介をさせていただきます。皆様から向かって右側は平井伸治鳥取県知事でございます。向かって左側は室崎益輝日本災害復興学会会長でございます。本日はお二人からお話をいただきたいと思っております。まず、初めに平井伸治鳥取県知事より「鳥取県西部地震の教訓とこれからの地震対策について」お話をお願いいたします。

○ 平井 伸治 (鳥取県知事)



皆様、おはようございます。昨日に引き続きまして、今日は米子で、このフォーラムのパートⅡをさせていただくこととなりました。本日は、大変にお忙しい中にも係わりませず、室崎災害復興学会の会長様、あるいは山中先生、また後ほどは泉田知事もお見えになりますが、全国各地から多くの皆様にお越しいただきましたことに感謝を申し上げたいと思っております。そして、内閣府の阿久津政務官からも心温まるメッセージをいただいたところであります。集まった我々は、これからの安心と安全の社会をこの地域社会をもう一度作り上げていこう

とさせていただきます。本日は、大変にお忙しい中にも係わりませず、室崎災害復興学会の会長様、あるいは山中先生、また後ほどは泉田知事もお見えになりますが、全国各地から多くの皆様にお越しいただきましたことに感謝を申し上げたいと思っております。そして、内閣府の阿久津政務官からも心温まるメッセージをいただいたところであります。集まった我々は、これからの安心と安全の社会をこの地域社会をもう一度作り上げていこう



ということでありまして、10年前の地震、今でも思い起こされるわけでありまして、その地震からちょうど今日で10年目の節目を迎えました。全国各地から様々な善意を寄せられ、そして地域の中での助け合いの暖かみに触れ、我々は復興を遂げて立ち直ってくることができました。今日のこの日にまず多くの皆様に感謝を申し上げたいと思います。そして、我々が忘れてはならないのはその地震から学んで、次には安心できる地域社会を構築していくことだと思っております。これは地震国家と言われる日本におきまして、とっても大切な課題であります。その意味では、いろんな地域間で連帯をし、知恵を出し合って、そしてまた国だとか、あるいは県や市町村といった行政も加わり、本当に安心できるシステムを作っていかなければならないことだと思っております。そのためには、実は住民の皆様のお力や自助や共助がとっても大切な役割を果たすこと、これも我々の地震の経験から明らかになりました。現代社会の申し子とも言えるボランティアだとか、NPOという新しい社会活動が花開いております。こうした皆様のお力というものが大切なものになってきています。大きな力を寄せ合いながら、我々としては一つ一つの安心を一人一人の命を創りあげていかなければならない、守っていかなければならないのだと思っております。鳥取県西部地震であります、大変に大きな地震でありマグニチュード7.3という地震でありました。これは鳥取県の東部で発生しました鳥取大地震、昭和18年のことでありました。その時以来の大地震であり、阪神・淡路大震災もマグニチュード7.2でありますので、それを上回るような規模であったということでもあります。その西部地震でございますけれども、幸いなことに鳥取県内で死者はなかったわけでありまして、これは、助け合って、お互い支え合ってこの結果を生み出したものでありまして、今から考えると、これは最

大の収穫だったなあというふうに思います。ひょっとすると、この間まで「ゲゲゲの女房」というドラマをやっていましたが、妖怪たちが守ってくれたのかも知れません。この鳥取県西部地震、幸い1人も命を失うことがなかったわけでありまして、その震源は鳥取県の西伯町でありましたけれども、このように関東地方から果ては九州のほうまで揺れを感じるところが広がったわけでありまして、今でもこの地震の活動は完全に終わったわけではなくて、つい先日も下から突き上げるような、そういう揺れがあったと伺っております。ただ、この当時のような凄惨な状況は今日ではないわけでありまして、復興を遂げてきた歴史であったと思っております。先ほどもご紹介がありましたように、横ずれの断層の東西ですれ違ような、そういう断層が引き起こしたものでありまして、大きな揺れを観測した鳥取県の状況をご覧くださいますと、一番揺れが強かったのは中山間地の日野町、それから、それと併せて境港市、沿岸部のほうであります。また、これに続いて当時の西伯町や会見町、溝口町、岸本町、日南町、江府町、淀江町、日吉津村、こうしたところで6弱の揺れを観測し、米子市では5強の揺れを観測したということでありました。ただ、これは観測点でありまして、実際にはどれほどの震度がそれぞれの地域であったかというのは、一概に本当は言えないんだと思っております。例えば、西伯町と会見町と、それから溝口町とに跨るところにとっとり花回廊という県営のフラワーパークがございますけれども、そのフラワーパークでは設計では震度7でも壊れないものが壊れました。実は、風評被害を気にしまして、営業は一部を閉鎖しながらも続けていったんですけども、そういう大変な揺れがあったことは間違いのないわけでありまして、できたばかりでちゃんと設計したのも一部破断をするということがございまして、ところによっては大変大きな揺れが



あったと思います。そういうようなわけで、各地で様々な被害を引き起こしたわけでありまして。これが先ほどもご覧いただきました地震の余震の分布図であります。これを見ますと、くっきりと断層が浮かび上がるわけでありまして。日野町のほうから西伯町を經由して鳥根県のほうへと抜けていく、そういう余震の地図でございますけれども、このように断層が走っていたわけでありまして。そういった関係で鳥根県の伯太町だとか安来市、あるいは岡山県の新見だとか、そうしたところでも被害が発生をしたわけでありまして。これは、当時の被害の状況を振り返る一助として持って参りました。左上のほう、さっきの画像にも出ていたけれども、境港市の出雲大社でございます。出雲大社の上道協会なんですけれども、これが、出雲大社が壊れたということが大々的に、最初に報道されましたら、鳥根県の出雲大社が壊れたと錯覚する人が随分全国で出ました。あつちに風評被害が広がってしまったわけでありまして。それから同じ境港市で、下のほうは液状化現象が起こっております。竹内の工業団地の中でありまして。ここに限らず弓浜半島一帯で起こっております。日吉津村だとか、米子市でも起こりました。不思議なことに帯状に起こるんですね。東西方向にザーッと帯状に、被害が強い地域が発生をいたしました。おそらく地震の波動との関係なのかなあとおっしゃりました。右にございますのは、これは今ベニズワイガニの漁が始まっておりますが、そのカニかご漁船が着く漁港の岸壁、境港であります。これは、本来まっすぐです。右側のほうの喫水線もまっすぐでありますし、ここにある排水溝も上にかぶせ物がしてありますが、全部まっすぐだったわけでありまして、支柱ごと横のほうにずれるようにして倒れている。いつぺんに地震波が襲いまして、そしてこのように押し出してしまったような形になったんだと思います。目の前に見えるの

が鳥根県の横の半島でございます。私も専門家ではないのでよく分かりませんが、どうしてこの境港で地震が大きくなったのか、ひょっとすると鳥根半島の強い岩盤が影響したのかもしれない。従いまして、挟み撃ちをするように鳥取県内では南のほうの日野町から北側にかけて、さらに境港というところで大きな揺れが観測をされたということでありました。今日、特にテーマに取り上げています中山間地でありまして、多くの被害が発生しました。左上は旧の溝口町、現在の伯耆町であります。日野町と溝口町を結ぶ県道のところでありまして。上からバラバラと落ちてきたわけでありまして。中国山地は花崗岩質でございます。そんなに頑丈なところばかりでもございませぬ。従いまして、急峻なところでこういうように上から落っこちてきた状況がございました。図をよく見ますと、写真の真ん中に白い車があつてペシャンコにへしゃげています。この中に実はご夫妻が乗っておられたんですけれども、幸い、後部座席のほうにおられたわけでありまして、助かったということでありました。左下のほうは、これは日野の老人保健施設の入所された方でありまして、屋外のほうへと避難された様子であります。右上は西伯病院の患者さん、こちらでも避難をされました。また、下のほう、避難所の医療班で検診を受ける被災者の様子がございまして。多くの医療ボランティアの方も出ていただきまして、巡回をしていただいたりご協力をしていただきました。日野では、日野病院が大きな被害を受けましたけれども、そういうわけで地域の保育所でしたか、施設のほうにいったん避難をされ、幸い、建てかけてほぼ完成していた新しい病院のほうに移ることになりまして、何とか機能を保ったということがございました。それから住宅被害、これも中山間地を中心に大きく発生をいたしました。全壊の家屋、赤紙を貼った家屋が394戸ございました。それか



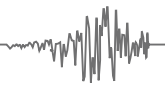
ら半壊だとか一部損壊を合わせますと、実に1万7,000棟の被害家屋が出ました。ですから、住宅被害が非常に大きかったという状況でした。亡くなられた方こそおられませんでしたが、やはり家の中におられた方とか、いろんな形で怪我をなされた方がいらっしやいまして、141名の皆さんが怪我をされたということでございました。左上のように完全にへしゃげてしまった家があったり、それから右のほう、これはこの地方の特性かもしれませんが、中山間地の坂道のところに家を建てるわけではありますが、下のほうに土台として石垣を作るんですね。そういう石垣が壊れてしまっています。また左下のほう、先ほどもございましたが、多くの家が瓦とか損傷がございまして、ちょうど地震があつて数日経った時に、雨が降る予報になってまいりまして、慌ててボランティアの方々にも手伝っていただき、兵庫県からブルーシートの搬送もしていただき応援もしていただきまして、このように復興を遂げてきたわけでございます。実は私自身もさっきの画像にもありましたけれども、米子で開かれていました介護保険の大会のほうに出ていまして、それから県庁のほうに戻ろうとしたんですね。そうしますと、米子のバイパスのほうに出てトンネルに入ったところ、車の中でありましたけれども、車がもの凄く揺れたわけであります。最初、これは車がパンクしたなあと思ひまして、まさか地震が起こると思わなものですから。それで恐る恐るトンネルから出たところで車を止めたんですが、タイヤは全部付いていますし、よくよく見ますと橋脚ごとみんな揺れているわけですね。最初は何のことかよく分からなかったんですが、その後でこれは地震だったんだということが分かりまして、慌てて米子に設置されました現地の災害対策本部のほうに私自身も入りました。それで、鳥取県庁に設置をされました災害対策本部と繋ぎながら、現地のほうで

いろいろと手当をしたわけです。ブルーシートも、早速に各市町村から必要数についてのお話がございますして探し回りました。スーパーマーケットとか、あれは巨大な備蓄倉庫だと思ひまして、そういうところにも問い合わせをして、何とか調達できないかとやったわけではありますが、ああいうところで市販しているのは小さいですね。ですから間に合わなかったです。それで、やっぱり大きいブルーシートを何とか取り寄せなきゃならない。そこで、隣の兵庫県さんが阪神・淡路大震災の備蓄関係もございまして、それを融通して下さったということでありました。ライフラインとか、公共施設もだいぶやられました。左上のほう、先ほどは日野溝口線でありますけども、このように江府町でも路肩が崩壊をして道路に亀裂が走るということ、これ随所で起こりました。実は14カ所ほどだったと思いますが、全面通行止めを行いました。現場のほうは、てんやわんやだったんですね。最初にこうしたところに車が入って行くといらいことになるものですから、土木関係の職員総出で出て行きまして、パトロールをして、被災箇所を発見すると通行止めをしたり、一部片側交互通行にしたりという措置を緊急にまず取りました。それから、応急処置に入るわけであります。実は震源地の日野町の町長さん、景山町長さんですけども、景山町長さんは当時私と一緒に米子に置かれた現地の対策本部のほうで、土木関係の指揮を執っておられました。みんな寝ずにやっていたことを今でも思い出します。それから右上のほう、JRの伯備線が土砂崩れで不通になりました。こんなこともありまして、日南町の庄山がしばらく伯備線の始発駅になりました。そうやって鉄道被害も発生しました。また下のほう、これもその晩大変な問題になったわけではありますが、旧西伯町の赤谷というところの橋でございまして。この赤谷橋でございまして、これが集落に入る唯



一の道路だったんですね。この橋が落ちちゃってしまっただけですから、例えば食糧を運ぶとか、いろんな緊急物資を運ぶにも運べなくなっていました。下には当然ながら川がございまして、何とかしなければならぬ。取りあえず応急でも渡れるようにしようということをお願いしたんですね。それで私も現地のほうでも、どうやってやったらいいかということで、みんな顔を付き合せてあーだこーだ議論をしました。技術者というのは大したものだ、あの晩は本当に感謝して感心したものであります。技術者の皆さん、土木関係の職員が「これはビニールパイプでやれば何とかできる」と言うんですね。ビニールパイプで橋を取りあえず復旧しようということになります。皆さん、想像がつかますでしょうか。実は私よく分からずに、それを当時鳥取のほうにおられた片山善博知事のほうに電話で報告をしまして、「問題だった赤谷橋。これ何とか今晚中に復旧できそうです」と。「取りあえずみんなで話し合ったら、ビニールパイプで復旧できることになりました」と申し上げたんですね。そしたら、片山さんが「ビニールパイプでどうやって直すんだ」と言うから、「ビニールパイプを束ねるか何かして直すんじゃないんでしょうかね」と言ってお答えを申し上げたんですね。これ真っ赤な嘘でございまして。後で夜が明けていろいろと話を聞いてみますと、橋というのは水の流れと交通が交差をするところになります。ですから、水を流しながら交通ができればいいわけですね。ですから、その水路のところにはビニールパイプを置きまして、そこを後は土で埋めてしまうと。そうすると水の流れと交通は取りあえず両方確保できると、こういう仕掛けでございまして。「なるほどなあ。やっぱり技術者というのは大したものだなあ」というふうに思いました。橋を架け直すということに頭

がいたものから、そういうことができないんだなあということをお願いしたわけでありまして。また、右下のほうであります、夜を徹しての水道復旧作業の境港市の様子がございましたけれども、多くの世帯で断水をしました。3千数百世帯だったと思いますけれども。その後も給水車が走り回るとか、近隣の市から結構応援が来ていただきまして、本当に助けていただいたことを思い出します。電気も止まりました。5千世帯余りだったと思いますけれども、電気も停電をしましたけれども、割と早めにこれは復旧をしました。後でよくよくお伺いしますと、電力会社の皆さんはここでの地震で大変に青くなったそうでありまして。それは震源地のすぐ近くが、電力の送電系統だとか、いろんなことで心臓部といってもいい場所だったそうでありまして、ひょっとするとえらいことになるかもしれないという危険性を感じられたんだそうでありまして。ただ、幸い電気は数時間で復旧をすることができました。ライフラインの復旧も大変時間の掛かったものもございました。それから産業関係であります。農業の被害は非常に大きなものがありました。百数十億円ぐらい被害がありました。さっきの公共土木被害も大変でありまして、だいたい5百億円ぐらいだったかなと思っておりますが、そういう被害がありました。この農業の被害、水田が割れてしまうとかということがございまして、被害がネギだとか、あるいは下のほうにありますが、これは当時実りを迎えていた新興梨、これが地面に落ちて駄目になってしまったんですね。右下がこれはネギです。これは、液状化で海水が噴き出して、塩が入ってしまいました。それでやられてしまいました。牛も受難でございまして、牛舎がやられてしまうなどで、和牛も人間と一緒に避難をしたという写真でございまして。農業もここから立ち直っていきました。農業水路もやり変えたことはもちろんでありますけれども、一部の所では昨日は日野町で開かせていた



だきましたけれども、水田よりも水を使わない蕎麦をいっそやってみようかと。県も復旧委員だとか、みんなで協力をさせていただいたりしまして、転作を図っていったんです。今では、蕎麦が結構震源地近くの日野郡で栽培されるようになりまして、昨日シンポジウムが開かれた根雨の町でも3カ所ほど手打ちの蕎麦を出すお店ができたりしまして、そういう副産物が登場したりしました。ともかく、その農業被害はかなり大きなものがありました。西部地震からの復興であります。やっぱり初動が大事だなあとつくづく思いました。私自身もそうでありますし、鳥取県庁の職員や市町村の皆さんも、行政関係者は痛感されたと思いますが、災害対策というのは行政の基本だと思えました。目の前で困っていること、これを何とかしなきゃいけない。その解決策を考えて、そして速やかに実行する。これを続けて、中断なくやっていくこと。これが災害対策だと、この震災から教えられた思いであります。災害対策本部は直ちに設置をさせていただきまして、その日のうちに災害救助法が適用されました。まず、西伯町とか米子市、日野町、この3市町が適用され、その他の市町村にも適用が広がっていきました。一つ、その意味ではラッキーだったのは、この隣の建物でやっていたイベントがその地震の真っ最中、冒頭のビデオであります。あれが介護保険のイベントだったんです。そうしたら厚生省の幹部が大挙して来ておまして、こっちのほうに結構な人が集まっておられました。それで私はその米子で一晩中対応をやっていたわけであります。そこに、ひょっこり「もう今日は帰れなくなった」と言っていて、厚生省の人たちがやって来まして、「平井さん、いつでも災害救助法適用するから言ってくれ」と言うわけですね。「これは儲けた」と思いました。それで、早速県庁の本部と相談をして、速やかにそういう災害救助法を適用してもらおうというよう

なことをしていただけたんです。ですから、非常に迅速にこれはしていただけたなあと思います。それから、大臣だとか、当時の片山知事だとか、いろんな被災地の視察が続きました。翌日には初動をぜひしっかりやろうということで、国からは扇千景国土庁長官が来られました。そして、下のほうに写真がございしますが、上は県議会の視察団です。下のほうは国土庁長官の視察風景であります。扇千景長官が久しく被災地を回っていただきまして、つぶさに現場を見ていただきました。この後の災害復興にも役立ったと思っております。この扇長官、来られたわけでありますけども、記者会見の前にレクチャーをしまして、こういうような地震の状況であります。今、被害はこんなような集計をしておりますとか、いろんなお話をさせていただきまして。それで、実はその地震が起る約ふた月ぐらい前にちょうど鳥取県西部、それから島根県東部あたりを震源とするマグニチュード7.2の地震を想定して我々で防災訓練をやった。「図上訓練をやりまして、その時に自衛隊だとか、いろんな人たちとのパイプができて、お互いに顔も知り合えたとし、非常にそういう訓練が役に立ちました」というふうに申し上げましたら、このことを扇長官が耳に留めていただきまして「へえーっ、鳥取県は素晴らしかったですね。リハーサルをしていたんですね」とおっしゃいました。やっぱり芸人から国土庁長官になられた方は言うことが違うと思いましたが、そんなようなことをご視察をいただいたりいたしました。その西部地震からの復興関係など、我々のほうで苦労したことがありました。道路だとか、河川、あるいは農地災害もそうありますが、国からの手厚い支援があります。これには正直助けられましたし、役に立ったと思えます。しかし、矛盾を抱えるわけですね。実際に被災の現場のほう





に行きますと、皆さん「いやあ、もう道路は直しますよ」「川もすぐきれいにしましょう」と。「農地はまた元に戻すようにやりましょう。あるいは他のこともいろいろ工夫してみましょう」と。そんな話是可以するんですが、一番皆さんが困っていたのは「家の中に入れない」とか「家の中がガチャガチャだ」と。そういうところはボランティアの方が県外からだいたい6,000人くらい来ていただきまして、うち県内からも2,000人くらいいたと思いますが。そういうことで助かったわけがありますけども、ただ家を直すことができない。結局、このままだと道路や川はきれいに元通りに戻っても、住む人がいなくなってしまうのではないかという極論さえ感じられるようになったわけでありました。そこで鳥取県では、当時のタブーを破るような形で、個人の住宅再建支援制度を導入しようということになりました。しかし導入する時、私も市町村長さんのところを回ったりして、お一人お一人と議論をしましたけれども、財政負担の問題だとか、あるいはどういう範囲で呼び掛けるかとか、非常に難しい作業でありました。しかし、そういう中で一つのスキームを見出し合意点を見出して、鳥取県では住宅の建設に県が3分の2を負担して300万円を限度にやりましょう。住宅補修については150万円を限度にやりましょう。住宅の液状化復旧、これは例えば住宅団地が液状化してしまっていて、そういうところの復旧などに考えた対策であります。石垣とか擁壁も壊れるという地域的な特性の高い災害も発生しました。これが元へ戻りませんと安全な暮らしができません。そこで、これについても住宅の補修に準じた対策を取るということにしました。こういう対策を打ちまして、全体として住宅関係、建設だとか補修関係で、県費ベースで50億円、それで市町村ベースも含めて90億円ぐらいの負担です。そして住宅液状化復旧、石垣・擁壁補修そ

ういうところも入れていきますと総計で100億円ぐらい、地域から公費を補填して、そして補っていくということをやりました。これは後々財政負担になります。震源地に近い日野町は、これで財政が悪化するという引き金を残念ながら引いてしまうということになりました。県として、前の片山知事は借金の返済対策、これは地方の自立だということで、町で全部という話だったんですけども、私が就任した後、今の景山町長と話し合っただけでスキームを変えまして、返済の猶予を行いながら、財政再建を図っていかうと。やはり、地域としても被った財政負担を辛抱しながら直していかうという今方向に転換しているんですけども。ともかく、かなり大きな地域の負担を伴うことであったことは間違いないと思います。当時、国のほうではこうしたところまでお金が出ませんで、住宅を壊すことだとか、そういうところまではお金が100万円とか出るような仕組みであったわけでありました。このへんはタブーを破って頑張った結果でありました。実は住民の皆さんも大変でありまして、300万円の家が建つわけではございません。皆さんも容易に分かることであります。これは呼び水以上のものではありません。ですから、問題が完全に解決をするわけではありません。地震保険とか入っておられる方は別でありましょうけれども、そうでない方にはやはり重い負担が残る、住宅ローンだとかそういうことが残ります。もちろんそのローン対策で無利子に補填していかうというような事業も導入しましたが、それでもみんな辛抱して10年間で立ち直ってきたというのが、私たちの正直な感想であります。決して、これがあったので全部助かったというバラ色のものでもなかったのも事実であります。その後、平成19年に国のほうでは制度を変えられまして、能登半島沖地震のところから新しい制度が適用されました。県と市町村では協力

して、こうした住宅再建支援をやっていこうということに今ではなっております。西部地震では、ボランティアの皆さん5,300人余りの方に来ていただきました。そして、そのうち県内からは2,000人ぐらいの方に来ていただきました。本当にありがたいことであります。そして、そのボランティア活動の中から様々な今社会福祉の活動なども生まれていまして、日野ボランティアネットワークの皆さんは、フィールドを広げて地域の信頼を得ながら活動を今でもされておられます。西部地震の教訓を踏まえて、やはり迅速な生活基盤の再生ということをしないと過疎化がさらに進んでしまうんじゃないかということがあったと思います。それから発災直後、なかなか情報収集が難しいです。阪神・淡路大震災の時、段々と死者の数が増えていくことで、だいぶ非難めいた話がありましたけれども、我々も現場にいて、なかなかどれだけの人が犠牲になったかを判断することは本当に難しいです。我々のところは幸いゼロのまま済みましたから良かったですけども、少しずつ夜が明けて分かってくるといふ被害はたくさんあるのだと思います。ただ、迅速に、空から陸からいろんな情報収集をした上でやらなければいけないなあとこのように思います。それができないと災害の初動対策もうまくいかないわけでありまして。外部からの応援も必要です。県庁からも応援をだいぶ出しました。延べ2,000人ほど出した次第であります。物資備蓄も必要です。当時は、県も市町村も、まだ物資の備蓄はほとんどできていない状況でありました。自助・共助の重要性、公助と共に必要だという限界も感じたわけでありまして。そうした記憶を踏まえまして、先ほど申し上げました住宅助成であります。今、国制度が平成19年からある程度導入されました。現在では、それを補うような形になってはいますが、住宅再生の支援資金を鳥取県で市町村と一緒に

積み立ててきております。今、17億ほど積み立てておりますけれども、20億を目指してやっております。国制度が適用されないところ、全県で10戸以上の住宅が全壊となったような場合に適用しようというルールで、我々のほうでは基金を作ってきております。幸い今まで、発動したことはございません。国制度のほうは、先ほどの能登の地震など各地の災害に役立てられ始めたところでもあります。鳥取県のアイデアから、新潟を經由して全国へと広まった。そういう制度ではないかと思っております。それから、県庁の対策でありますけれども、災害時の緊急支援チームというものを作りました。土木技師だとか、建築技師だとか、保健師だとか、事務要員だとか、当時西部地震の時の教訓を得ますと、こういうようなチームを組んで派遣をしていくというのが良いというのを経験的に思いました。こうしたチームを組みまして、県内は元より、県内の台風災害とかにも出て行きますけれども、県外でも新潟だとか、いろんなところに出て行かせていただいております。さらに職員災害応援隊という組織です。西部地震の時に、ボランティアだけでなく、「県職員でもボランティアとして出て行こう」という呼び掛けをしました。それで、ビニールシートを張るとか、畳をもう一回やり直すとか、家を片付ける達人が県庁の中にも結構生まれまして、そうしたメンバーが中核になりまして、現在316名の職員災害応援隊というボランティア的な活動を中心とした活動を行う組織を作っております。これも、例えば豊岡での水害とかいろんなところに行っています。先般の佐用の水害の時にも出動いたしました。兵庫県で活動させていただきました。それから、県と市町村での連携の備蓄も進めております。県のほうでは大きめの物、市町村では身近な物という分類で役割分担をしてやるようになりました。さらに、民間の皆さんとも協定を結びまし

て、例えば食料品だとか、あるいは日用物資だとか、スーパーマーケットとか、様々なところと協定を結んで供給をしていただける体制ができてきております。鳥取県西部地震の教訓を踏まえて、昨日もお訪ねいただいたかもしれませんが、平成18年に日野町に展示交流センターを造っています。これが、今の日野ボランティアネットワークの活動拠点にもなっているという次第であります。災害に強い地域づくりをやりようということで、昨年の7月に鳥取県で防災危機管理条例を制定しました。お互いの役割をはっきりし、リスクを勘案した戦略的対応をしよう。役割を明確にするということではしておりますが、特に防災危機管理活動を強めようとか、災害のない町づくりを進めようとか、高齢者・障がい者の災害時要援護者を助けるということ、この情報共有も含めて条例に書きました。関係者相互の連携を図ることなどあります。こうした甲斐あって、今年度の末までに全部の市町村で災害時の要援護者の名簿ができる見込みになりました。また、それぞれの市町村での全体計画、そういう要援護者の救出をする計画が整う運びになりました。ただ、いろんな訓練だとか、個別の計画・プラン作りも必要だというふうに考えております。また、つい先だっちはこうした条例に基づきまして、震災対策のアクションプラン、死者数80%以上、直接被害額40%以上減少させようという減災プランを作りました。住宅の耐震化だとか、あるいは自主防災組織、そういうものを整えていこうということでもあります。地震から10年経って、思い出話だけに終わってしまうのではなくて、もっと生き生きとしたことにしなきゃいけない。昨日は、日野町の根雨小学校・黒坂小学校の発表を聞いていただけたと思います。地震の恐ろしさ、あるいは助け合うことの大切さ、普段からの備えの必要性。こういうことを肌で感じてもらおう。幸い、この地には

地震を身近に体験をして、そこから立ち直って立ち上がった人たちがたくさんいます。そういう人材を活かして、そういう教育をしよう。京都大学の防災研究所に委託をしまして、今そうしたカリキュラムを作ろうとしているところでもあります。さらに、これは先日みのもんたさんの番組でも取り上げられて誉めていただきましたけども、中山間集落見守り活動というのを鳥取県で、全国では際立った活動だと思いますが始めております。右上のほうにありますのは、これは「あいきょう号」というやつでございますけども、安達商事さんの、走り回るコンビニエンスストアみたいなものです。これを、車は県のほうで助成をして造っているわけでありまして、こうして見回る人たちがいっぱいいるわけですね。日本海新聞社さんという新聞社とか、あるいは生協さんだとか、あるいは牛乳を配る大山乳業さんだとか、いろんな形で地域の中を毎日回る人たちがおられるんです。こういう皆さんと協定を結びまして、「お年寄りに異変があったよ」とか。最近、消えた高齢者問題がありますけども、鳥取県内ではこれは起こっていません。「こうした活動も影響しているのかなあ」と、みのもんたさんは総括されていまして、私たちが言うよりも、みのもんたさんが言ったほうがよっぽど説得力がある。残念ながらそうなんです。みのもんたさんには誉めてもらいましたが、災害関係もそうですよね。そういうことでも役に立つ、そういう協定であります。それから、自主防災組織、日野町だとか、日南町、意識の高いところでは、100%のところも出てまいりました。残念ながら鳥取県内はまだ3分の2程度でありまして、全国平均を若干下回っています。こういう場所で申し上げるのがいいのかどうかはあれですけども、この近所だと米子市さんとか、境港市さんとか、2割、3割ベースの組織率というところもございまして、



もっと一生懸命できないかなあというふうに思っています、こういうシンポジウムをきっかけにして自主防災への意識が高まればなあと思います。ただ、境港市さんでも素晴らしい活動をやっているところはございます。例えば、米川の自主防災会。これは、境港で震度6強の地震があった時に威力を発揮しました。自主防災会がありまして、そして既に活動を始めておられたわけです。それで、自転車で被災住宅を全部回りまして、安否確認を速やかに行いました。それから、近くの安全なところに誘導をして炊き出しを始めた、本当に早い段階からスタートが切れました。こんなような経験があるものですから、鳥取県内で「やってみよう」というところが出てきております。黒坂地区の自主防災会、これも良い活動をされていることがよく例に挙げられますが、ここは昔からであります、京都もそうでありますけども、まちちゅうと言われるそういう伝統があるんですね。隣近所、みんなで一緒にいろんな活動をする。本当にいろんな活動をします。例えば、因幡二十士というそういうこの地域のストーリーがあるんですけども、幕末に活躍した志士がいらっしゃる。それが居留していたお寺を検証しようという活動をやるとか、あるいは黒坂城というお城を盛り上げていこうとか、普段からいろんな活動をしているんです。そういう一環として、自主防災委員会というのを立ち上げられまして、地震の後です。それで、避難所にいきなり行くのは難しだろうと。まず仮避難所、22箇所的身近なところにまず連れて行く。そこで集まって点呼を取って、そして本当の避難所のほうへ行く。そういうのを編み出したり、あるいは竹竿と毛布とか、あるいはジーパンのようなそういう服とかで応急の担架を作ってやるような、そういう工夫を編み出したり。いろんなことをされておられます。江府町でも池の内自主防災組織では、留守

を任せろということをもっとにしまして、老人クラブの皆さんが平日の昼間に防災体制をやるということでもあります。今、お年寄りがお年寄りを助ける時代なんですね。黒坂の皆さんもそういうふうにおっしゃっています。それが今の避難の難しさではないかということでもあります。まだまだ話したいことはいっぱいあるんですが、シンポジウムだとかそれから室崎会長のお話などもございまして、時間も来ましたので、このあたりで私のほうのご報告は終わらせていただきたいと思います。ベンジャミン・ディズレーリというイギリスの宰相であります、19世紀の後半、特にヴィクトリア女王に可愛がられたことで有名でありまして、桜草をたびたび贈られていたというそういう逸話もある方です。この方がこういうふうに言っています。「行動したからといっていつでも幸福になれるわけではない。しかし、行動なくして幸福を得ることはできない」「Action may not always bring happiness, but there is no happiness without action.」というふうに言っています。あるいは、こういうこともディズレーリは言っているんですね。「We are not creatures of circumstance, we are creators of circumstance.」と言うんですね。すなわち、「私たちは状況によって作られるものではない」と。「環境によって作られるものではない」と。「私たちこそ状況を作り出す、環境を作り出すものなんだ」と。こういうように言っているんですね。やっぱり行動を起こすこと、これが災害に立ち向かうこと、そして暖かい地域社会を守ること。ご近所付き合い、そういうところが本当の意味で中山間地の災害対策なのかもしれないと痛感をします。我々の地域社会を本当に暖かいものにしていくことで、安心の仕組が生まれます。ぜひとも、今日のシンポジウムを通じて皆さんからいろんなお知恵を出していただき、未来の日本を創っていただきたい



と思います。本当にありがとうございました。

○司会

続きまして、室崎益輝日本災害復興学会会長より「中山間地域の地震対策を考える」というテーマでお話をいただきます。それでは、お願いいたします。

○室崎 益輝（日本災害復興学会会長）



皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました日本災害復興学会の室崎でございます。今、非常に丁寧なかつ示唆に富んだお話を平井知事から伺った後でございます。

もう平井知事の話に付け加えることはないんですけど、今の話を参考にしながら、少し話を広げて日本全体の中山間地の防災についてお話をさせていただきたいと思います。ここに「はじめに」と書いてあるんですけど、これはむしろ「終わりに」と書くべきだったのです。今日話をする最終的な結論はここに書いてございます。「地域の実態に即して、地域の資源を活かして、減災や復興を考えることが凄く大切である」と書いています。政府の中に中央防災会議というのがありますが、その中央防災会議が、今年の4月から新しく地方都市の防災対策・復興対策の委員会を立ち上げて、地方都市、あるいは中山間地の防災をどうすればいいのかということをしっかり取り組むようになりました。これは、画期的なことなんです。今までは首都直下だとか、南海地震というかむしろ大都市を中心に防災対策というのを考えていました。それから国の制度や基準もだいたい大都市中心に、基本的には東京がどうなったらということから物事を進めていたんですけど

も。実はこれちょっと後で出てきますが、日本の国土の7割は中山間地なんです。正にそういうことから言うと、災害の発生の頻度・比率を見ても、大都市で起きるよりはるかに地方都市・中山間地で災害が起きることが多い。そういう状況を踏まえた時に、地方都市の問題をしっかりと防災対策で位置付けて考えないといけない。さらに、大都市も地方都市も、それから市街地も中山間地もそれぞれの地域の顔を持っている。それゆえに、それぞれの地域は地域の実情に即して防災とか、安全とか、あるいは復興というのを考えないといけないのであって、一律的・画一的な制度ではうまくいかないんだってということを、改めて我々に教えてくれているということだろうと思うんですね。それを最初に教えてくれたのが、10年前の鳥取県西部地震だと思います。当時の知事の片山さんと、今、平井さんもおられますけれども、鳥取県の方々が個人の住宅にしっかりと公的な支援をするんだって新しい制度を鳥取県独自で作られた。それはどうしてかということ、国の制度では被災者は救えない状況があったということです。さらには、鳥取というところの過疎化の状況の中で、地域を発展させるためにはそこにお年寄りが必要がある。そのためにもそういう住宅再建にきちっと行政が手を差し伸べていかないといけないということを、この新しい制度で教えられました。「ああ、地域のことをしっかり考えないといけないんだ」ということを痛感させられました。その流れが今どんどんどんどん大きくなっていて、鳥取県だけではなく日本全体で地域に根ざした防災・復興を考えていこう。そういう時代が生まれてきたというように思います。その最初のきっかけが鳥取県西部地震にあったわけですので、我々は鳥取西部地震から多くのことをしっかりと学ばないといけないと思っています。単に、鳥取が最初だから学ぶという

ことではなくて、今の平井知事のお話にも出てきましたけども、凄く大切なヒントを鳥取県の地震とその後の復興の中で出されているので学ばなければならぬ。良い取組がたくさんあるということで、いい取組があるから学ぶということだろうと思うんですね。今日は、知事のお話を聞いて私が話すというので、ちょっとレジュメから離れませんが、私は鳥取県西部の地震から学ぶ大きな3つのことがあると考えています。

1つ目は、被災地・被災者のニーズに寄り添って対策を考えるということです。鳥取県の地震の後で、平井知事もすぐ現地に行かれておりますし、それから片山さんも現地に行かれた。現地に行って被災者の方と対話をする、話を聞く、そういう中で被災者が一体何を求めているかを把握する。要するに復興対策の原点は被災者の声を聞くということからスタートする。僕はそういうところから住宅再建の支援制度ができたというふうに思っています。被災者・被災地の現場から災害対策を進めていくという視点が一つ貫かれている。その代表例が、独自の住宅再建支援制度で、日本にこれは大きな影響を与えたものだったと。

2つ目は、行政の対応のあり方。これは、先ほどのお話でもそうですけど、できるだけスピーディーに迅速に行うということ。機動的っていうのか、効果があるようにうまく行政の資源を活用するということです。一言で言うと行政の危機管理体制をしっかりと構築するんだというようなことがはっきり示されているように思うんですね。先ほどの知事のお話の中でいろんなこと言われましたけど、私が一番評価しているのは職員の災害応援隊。これはすごいと思います。職員自身の中で自らのいろんな能力を開発して、即座に行って助ける。無論、先ほど説明したアクションプログラムというのは素晴らしいですし、それから防災危機管理条例、これも全国に先駆けて非常に

しっかりしたものを作られた。それは行政が県民の先頭に立って防災に取り組むんだという姿勢を示しています。正に率先性ですね。職員自身が出るっていうメッセージは、行政が先頭に立つというニュアンスが出てくるわけですね。それは、たぶん直後の知事さんやそれ以外の人たちの経験も踏まえて早く速やかに出ないといけないということが、素晴らしい危機管理体制につながっています。先ほど鳥取地震で非常に復興も早く進んだし、大きな地震だったけど被害は少なかったのは「妖怪」がいるからだっていう話が出ましたが、僕はその通りだと思います。僕は片山知事を妖怪だと思います。当然、平井知事も妖怪だし。それから、昨日、日野町の景山さんという町長がいました。この人もまた妖怪だというように思うんですね。その妖怪がどうして生まれたかということ、鳥取県西部地震の直後の緊急対応の中で、ひょっとしたら地震がこう言うと失礼ですけど、平井知事さんを支えてくれたかも分からない。そういう一つの修羅場を与えること、試練を与えることによって、妖怪が生まれたっていう気もいたします。その力がその後の復興に繋がっているのかなあと。行政の率先的なあり方っていうのを鳥取から学ぶべきことだっていうのが2番目であります。

3番目は、気づきというか、震災というのはいろんな将来の社会で考えるべき問題を投げ掛ける。限界集落の問題だとか、あるいは子どもの教育の問題だとか、地域の経済の問題だとか、いろんな問題を地震というのは投げ掛けてくれる。その投げ掛けた問題に早く気づいて、早く取り組むかどうか問われている。将来の課題に気づいてそれを具体的に実践されていったかが問われたわけですが、鳥取県では単に元に戻すということではなくて、もう21世紀、22世紀を見据えたそういう防災対策を始めておられる。その代表例が、僕は小学校の防災教育だと思うんです。昨日、根



雨小学校と黒坂小学校の発表を聞きましたけど、そこだけではないんですよ。今日、午前中には岩井小学校だとか、いろんなところでもいろんな訓練をされていると聞きます。それは未来を見据えて防災を考えておられる。小さな子どもさんからしっかりと、自然とか社会のあり方を教え、そこから防災をスタートするという意気込みが見られます。単にそれだけではなくて、地域の経済の復興だとか、そういうところに表れているように思います。そういう未来を見据えた社会づくりにそれを繋げておられる。この3つの点が、僕は鳥取県から我々が学ぶべき凄く大切なことだろうと。

これでほしい私の話は終わりなんですけど、そうは言ってもちょっとここにお呼びいただいたので、もう少し中山間地域の話をしていただきますけれども。鳥取県西部の後、4年後に中越。今日午後からもお話があると思いますけど、中越地震があって、能登半島地震が2007年。それから、中越沖地震があって岩手・宮城の内陸地震と続くんですね。この中には中山間地だけではなくて、市街地も大きな痛手を受けた事例が含まれます。中越沖というのは中山間地だけではなくて、柏崎っていう中規模な都市が被害を受けているわけなので、全てが中山間地の災害と言えないですが。概ね次から次へと中山間地で大きな災害が起きていることだけは事実。ここでは水害の話が抜けています。ゲリラ豪雨、集中豪雨の話を中心に加えると、まさに中山間地が大きな災害のターゲットになっているということがよく分かるんですね。それは、先ほど言いましたように、国土の7割が中山間地なので、当たれば中山間地に当たるということかもしれません。ただ重要なことは、この間の中山間地で災害が起きた時に、思いのほか被害が大きくなるんですね。高度成長というこ

の20年間の間に中山間地がすごく痛んだ。ここで脆弱って少し難しい言葉を使っているんですけど、災害に弱くなってきている。一つは人口の減少と過疎化ということもあるでしょうし。それから、山の問題、林業の衰退ですよ。山が非常に荒れ果てているというか、林業が一つの経済のシステムで成り立たなくなって、林業から手を引く人がたくさん出てくる。その結果、山が荒れているという状況の中で山が非常に崩れ易くなっていきます。このように、いろんな形で中山間地が疲弊し始めている。その最中に次々と地震が起き雨が降るので大きな被害が起きているということです。その背景に中山間地の脆弱化というそういう現象が同時に進行しているんだってことをしっかり掴んでおかないといけないというように思っているわけでありまして。そういう中で、中山間地で地震が起きれば何が起ころのかっていうことなんですね。これは、都市と違ったいろんな問題が発生をします。一番目は、先ほどこれも鳥取県西部で道路に大きな石が落ちて交通遮断がされたりした映像からも類推されますし、2年になりますか、岩手・宮城内陸地震なんか大きな山が山ごと崩れるというような現象。その中で河道閉塞って川が堰き止められるとか、そういうような山間地特有の大きなそういう形での被害が起きるといのが非常に特徴的。

2番目は、その結果ということでもありますけれども、道路が寸断される。先ほど旧西伯町の橋の話が出ていましたけど、道路が寸断されて孤立をする。先ほどの話では、一夜にして橋を修復されたので孤立は免れたかも分かりませんが、大抵は日本の場合はこういう山間地で起きると集落が孤立をする。救援の手がなかなか差し伸べられない、場合によっては情報も届かないということがあるんですね。これは非常に大きな問題で、次にもし南海地震が起きても名古屋とか和歌山とかの

町の中を応援隊が来ても、高知の山奥には誰も来てくれないという、そういう状態が生まれる。それは全国の全ての中山間地が抱えているハンディキャップだと思うんですね。

それから、3番目は、災害が起きると地場産業が駄目になる。先ほども鳥取の場合も農業の水田が非常に傷められたとか、梨が駄目になったとか、それから和牛の生産もうまくいかなかったというふうにして、地域の産業がガタガタになってしまうんですね。これは中山間地にとってみるとこの産業が潰れるということは致命傷なんです。それに代わる生きる術がない。そういうことで言うと先ほどの話にも少し関連するんですけど、住宅の再建だけではうまくいかないんだと。生業の支援という産業の支援と仕組みがきつと中山間地にはいるだろうということを教えているんですね。

最後に、これはニワトリと卵の関係です。いずれが先かとか分かりませんが、中山間地に進んでいる過疎化とか、限界集落化だとか、いろんな問題が一気に雪崩を打つように加速化して、場合によっては集落そのものが閉鎖をしないといけないということが起きるかもしれないという、そういう問題を中山間地というのは持っているんだということだろうと思います。先ほど気づきつていうことを申しあげましたけれども、いろんな大切な問題が地震によって炙り出される。それは、それを契機にして集落がつぶれていくという意味では災難ですけども、場合によっては、それは早く気づかせてくれて未来に向けての課題を教えてくださいというふうに考えれば、その課題にしっかり挑戦していくというきっかけにもなるだろうというふうに思っております。ただ、中山間地っていうのは大きな問題を抱えています。ここには集落機能の低下と保全機能の低下というふうに書いています。保全機能の低下ということは、これは中山間地を日本の国土の中でどう位置付け

るのかということに関係するんですね。昨日ちょっと根雨で行われた日野町のフォーラムの中でも少し議論があったんですけど、国全体として中山間地の機能低下は、命取りになる。中山間地の恩恵を受けて都市っていうのは成り立っている、いろんな意味で。例えば食糧危機っていうのがあります。昨日も美味しいお蕎麦を食べさせていただきました。こういう地方に来ると美味しいお蕎麦。僕は新潟に行くのが好きで、新潟に行ったら美味しいお酒が呑める。ひょっとしたら、鳥取も美味しいお酒があるのかも分かりませんが。美味しいお酒が呑める。そういうので、先ほどの岩手・宮城の内陸の栗駒というところでは山の中でイワナを養殖していたり、美味しいイチゴを作っていたりするんですね。それはとても美味しいんです。たぶん鳥取で言うと梨だとか、砂丘地のスイカだとかいろんなものがある。そういうものを作って、美味しいものを送り届けながら、日本の国の食糧需給って、これからやってくる食糧危機の問題に対して、きちっとその問題を正面から捉えて答えを出していただいているのが、僕は中山間地なり地方都市だし、地方の林業とか、農業だと思うんですね。1つはそれ。

それから2つ目は、これは山が崩れることで非常によく分かったんです。去年の兵庫県佐用の水害は山が崩れて、結果としては下流の川の市街地が被害を受けるわけです。山って日本の国にとってはどういう役割しているかというと、日本の国土の安全を守る保全機能なんです。例えば棚田っていうのがあります。棚田は一種のダムです。雨を一気に流さないで、その中山間地でうまく受け止めながら日本を守っていく。その自然があるということが、日本の都市の安全の大きな力になっているわけですね。さらにそれだけではなくて、癒し機能っていうのは表現がちよっと抽象的ですけど、日本のふるさとの景観という、この米子に

来ても大山の手前にきれいな緑があって、それで手前にはきれいな水田があって、水田越しに大山を見る景色があって、とても堪らなく素晴らしい景色。やっぱりこの景色っていうのはやはり日本の財産だし、そのことによって自然と人間の関係を学んだり、それから心が安らかになったりする。そういう機能を全てこういう地方都市の中山間都市が果たしているわけです。それを今ほっておくとどんどんどんどんこれが潰れていってしまう。本当にこれは無くなっていいんだろかっていうところが、大きな問いかけだと思うんですね。

そうすると、やはりその中山間地が果たしている大きな役割をしっかりと評価しながら、そこに対して国全体がしっかりとそこに対価を払うという表現いいのかわかりませんが、それを支えていく投資をしっかりとしないといけないし、それを守っていかないといけないんだということだと思うんですね。ところが、その保全機能というのが今どんどん災害によって低下をしていって、それだけではなくて今度は被災地の集落でいうと集落機能という、今までだったら何百世帯が寄り添って力を合わせてコミュニティを作って村を守っていたのが、その何百世帯、百世帯なら百世帯が、50世帯になり10世帯になっていくという流れが今大きくできあがっていて、それはその保全機能と係わって保全機能を支えるのは集落の機能なんですね。まさに山間地の集落の機能というものをしっかりと守らないといけないというのが、この中山間地を考える大きな問題点ではないかとちょっと思っているところであります。

何か集落が過疎化とか、限界集落化しているっていうようなことを強調し過ぎると、暗いイメージしか残ってこないんですけれども。いずれにしてもデメリットに向き合う必要がある。例えば、森林の荒廃の話。森林の荒廃なども、大きな政治的な出来事で始まっているんですね。私は

都市防災で都市や建築の防災に長く関わってきているので、森林の荒廃の契機については鮮明に覚えているんです。日本っていうのは、木造住宅は法律上2階建てじゃないといけなかったんですよ。それはどうしてかという、大きな地震が起きるので地震が起きて住宅が火事になると、3階建てにもなると大きな炎が上がって非常に延焼の危険を増すので、日本は地震国だからということで木造住宅は2階建てということが決められていました。その中で、貿易摩擦の問題が起きたのです。日本は建築基準法で木造は2階建てと決めていることによって、アメリカの2×4住宅が日本で売れないということにアメリカは気がついたわけです。「こんな法律を作っている。けしからん」というアメリカに強引に押し切られて、「いやあ、2×4の3階建ての木造もいいよ」とって建築基準にも書きちゃったわけです。そうすると何が起こったかという、どんどんそれが入ってくる。その2×4住宅の条件は、そこで使う材料はアメリカ・カナダの材料でなければならない。ということで、あれは輸入をしているんですね。そうすると、要するに日本の山で作ったスギとかヒノキを使って住宅を造るという市場が全くなくなる。全くというほどじゃなくて、最近は改めて日本の木造の住宅の良さを知った人が、伝統的な住宅を造るところも生まれてきておりますけれども。でも大都会では2×4の住宅に変わっていているわけです。ちょっと話が脱線するんですけど、鳥取県西部で学ぶということの話の中で、もう一つ先ほどお話していないことの一つがありまして、それは木造住宅の技術の話です。「地盤もいいから」とかいろいろそういう事情があって被害が少なかったと思うんですけど、僕はそれ以上に鳥取県の住宅の造り方に被害を少なくした原因があるとかんがえています。家は壊れたんだけど、でも人が死ななかったというのは、粘り

のある一つの伝統的な日本の木造住宅の造り方の優れた面が生まれたんだと。阪神の時にはこっぴどく伝統住宅って叩かれたわけです。2×4のほうが安全だと。それは間違いで、「日本の本来の住宅は地震に強いんだ。だから、鳥取でもあんな大きな地震なんかあったけれども人は死ななかったんだ」と。そういうように僕は学ばないといけない。そうすると、その地域の山から採れた材木を使いながら、命を守る。先ほどの石垣の話もそうです。あれ石垣が崩れましたけど、うまく石垣が崩れることによって家を凄く守っているようなところがあるんですね。鳥取の被害を見ていると。地元の石を使って木材を使って、伝統的な知恵を活かして、一つの集落というものを造る。それが、一つの防災力になっていると私は思うわけです。

「2×4が入って、けしからん」という話の流れなんですけれども、まさにそういうことで言うと、もう一度日本の林業を見直して、日本の木材をしっかりと使っていきような文化を再構築しないといけないと思っているわけですね。中山間地で進んでいるデメリットはデメリットで、それをどうやって乗り越えるかっていうことを考えないといけないと思うんですけれども、同時に中山間地にあるメリット。今申し上げた伝統的な住宅が頑張ってくれたっていう伝統的な文化っていうような。文化っていうのはそれだけではなくて、鳥取にもいろいろな文化があると。お祭りがあったりとか、出雲に行くとか出雲神楽がいろんな町々にあるっていうような特徴だとか。そういうお祭りとかそういうものも、地域の人々の絆を作る上で凄く重要だし、場合によってはそういうお祭りを通じて防災訓練をする。京都の鞍馬の火祭ってあるんですけど、これは収穫のお祭り。お米がたくさん採れたお祭りですけど、もう一つ裏側には子どもに大きな松明を担がせて、どうやれば火はいかに危険か、あるいはどうやれば火は消せるか

ていうことをお祭りで教えるわけです。そういう古い集落では、伝統文化を通じて防災の技術、例えば縄の縛り方だとかを子どもたちは学んでいくわけですね。文化にはそういう力があるんです。それはもう一度再評価しないとイケないし、それから何よりもコミュニティという、共助とか互助という世界が地域には残っているわけですね。運命共同体っていうか、お互いで助け合うという文化、地域の。何よりもそこに加えて豊かな自然。自然っていうのは時には我々にとっては猛威っていうか、破壊的な力を我々に与えてくれますけど、同時に我々を守る上でも十分大きな力を持っているわけでありまして、山もきちっと手入れをすれば本当は我々の命を守る資源になるんだっていうようなことなどが考えられるわけですね。あるいは私はこれも中山間地に取り組むようになってからですけど、棚田っていうのが凄く「好き」というのは外部の者の言い方で、農業をやっている方からしたら大変なんです、棚田は。だからその苦勞が分かった上で、でも凄くそれは景観としてもきれいだし、それから棚田で作ったお米って美味しいんですよ。手間暇が掛かっている分だけ美味しい。そういう意味での自然の持つ防災性っていうのもっとしっかり考えながら、中山間地にある自然だとか、コミュニティだとか、文化を活かしながら、中間地独自の一つの安全のシステムを作っていくということは凄く大切ではないかなあというふうに思っているところであります。

ここから結論になってくるわけなんですけれども、そういうだからデメリットを克服しながらだけど、メリットをどんどん活かしていく。中山間地のいいところ。これは、私は中山間地のいいところというのはもっともっと伸ばす。まずそのためには、中山間地に住んでいる人が中山間地の良さをしっかりと気づく、あるいは自信を持つということが必要であると思います。光り輝く中山間地域



を造ると。そういうものができると、都会の子どもたちも「ああ、夏休みはちょっと日野町に行ってキャンプでもしようか」という子どもたちがたくさん出てくる。そこにもう一度、都市と農村の新たな交流というか、都市のほうから農村にどんどん子どもたちが出てくるような世界が生まれてくるのではないかと。その中山間地が輝く存在に。これはそこに住んでいる人たちだけの力ではうまくいかなくて、日本全体がそのために努力しないといけないと思いますけれども、そういうことを頭の片隅でいうか、一番ど真中に置きながらしっかり取り組んでいかないといけないというように思っております。ここには日常時から非常時への連続と書いていますけど、日常時の過疎の問題とか、限界集落の問題に真正面から取り組むというのが防災に繋がるということでそういうことをやる。それから、中山間地なり地方都市が持っている互助と共助。互助というのは、一般的には共助と言われるんですけど、私は互助というようになるべく言うようにしているんですね。互助っていうのは、同じ地域に住んでいる人がお互い様という考え方で助け合うこと。共助っていうのは、むしろボランティアとかそういう人たちが外から助ける。外から助けようとする力と中では助け合う力、その二つが必要ですけど、それをうまく公助が支える。先ほど、鳥取には行政が率先的に防災をやる姿勢がみられるということはまさに公助。公助が何もかもしてはいけないんです。むしろそれは互助と共助をベースにしながらそれが公助を支えると。そういう形で中山間地っていうのは新たな希望を見つけることができるのではないかと。それから、自然共生は先ほど言いました。自然と共生するという文化をきちっと作り上げていくんですけど、それだけではうまくいかないんです。そこを補う、時代の流れとそういう地方都市が持っているギャップみたいなものを私はハイ

テクの技術が補わないといけないと思います。そのハイテクの技術、例えば情報のシステムみたいなもの。高齢者の安否確認が非常に難しいとか、そういうところでいくと中山間地ほど非常に優れた技術をどんどん投入をして、中山間地に欠けているものはそういうハイテクの力で補うようなそういう仕組みを作っていないといけないというように思っております。それから、4番目は今日の話で最初に言ったことであります。画一的な制度、あるいは国の基準だけではうまくいかないので、できるだけ弾力的に。先ほども少し住宅再建支援法で今問題になっているのは、それまでは一つの市町村で国の基準で10戸以上じゃないと対象にならないということだったんですけど、ちょっとこの間の水害で一応5戸まで下がりましたが、もう5戸だったら1戸も同じじゃないかと思うんですね。そのへんの少しギャップを今鳥取県の住宅再建支援法は横出し上乘せというか、ギャップを鳥取県独自の政策で埋めて、みんなが等しく条件ということに拘らず公平に支援される仕組みをやられているんですけど。まさにそういう制度を弾力的に運用する。制度が不十分なところは弾力的な考え方を運用するというようなことが、やはりこれからはそういう弾力化の時代、弾力的に防災行政を進める時代になっているということなことです。

5番目が、これで私の話終わろうと思うんですけども、鳥取県西部地震の住宅再建支援っていうのは一体どういう意味を持っていたのか。単に自治体がお金を出したということではなくて、個々の住宅の再建をすることと、地域社会がしっかり再生していくっていうか、社会を創っていくということが表裏一体の関係だ。だから、その住まいと地域コミュニティとか、地域の暮らし、地域の産業というのを総合的に考えていく。だから、個々の住宅を建て替えるということだけ



ではなくて、地域社会をどうやって元気にしていくかという視点をしっかり持って取り組んでいかないといけないのではないだろうかというふうに思っているところでございます。この1～5は、私が何か非常に何か上から目線で「こんなことをしろ」と言っているように聞こえるかもしれませんが、これは全部鳥取県の西部地震と、鳥取県西部だけではなくて、その後の日本の中山間地に起きた災害から学んだことなんです。これは、僕はこれからの日本の防災だけではなくて、地域社会のあり方を考える上で非常に重要な原則のように思いますので、まさに鳥取から生まれた教訓を日本全体の地域社会の文化にしていくことが今求められているのではないかというふうに思っている次第でございます。ちょっと抽象的なお話だったかもしれませんが、平井知事さんのお話を聴きながら、鳥取県西部後の取り組みの大切さを改めて痛感したという、少し感想的なお話になりましたけれども、少し話題提供させていただいた次第でございます。どうもありがとうございました。

○ 司会

ありがとうございました。皆様、対論していただきましたお二人に今一度盛大な拍手をお願いいたします。それでは、舞台の準備をしますので今しばらくお待ち下さい。

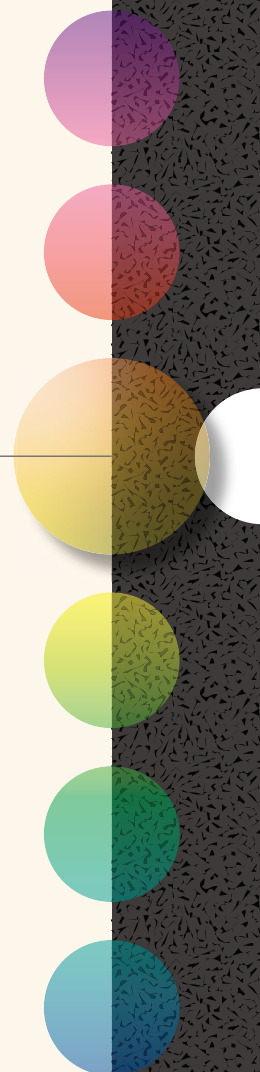
(終わり)



フォーラム概要

防災教育及び公開車座

座談会・討論会報告



10月6日 防災教育及び公開車座座談会・
討論会報告
(米子市文化ホール)

○ 司会

お待たせいたしました。続きまして、山中茂樹 関西学院大学災害復興研究所教授より、昨日、日野町で行われましたフォーラム「防災教育の取組発表、公開車座座談会・討論会」の報告をしていただきます。それでは、よろしくお願いいたします。

○ 山中 茂樹 (関西学院大学災害復興研究所教授)



関西学院大学の山中でございます。よろしくお願いいたします。昨日の内容を今日報告するというところで、まだ十分私の頭の中で咀嚼できていません

ので、少し不都合があるかもしれませんがご了承下さい。今、平井知事と室崎先生がお話なさったところで、大方の紹介はあったわけですので、私のほうは少し私の感想も交えてお話をしたいと思います。昨日は、最初に防災学習の取組発表というのがありました。これは、根雨小学校と黒坂小学校の取り組みのご紹介があって、それぞれで指導なさっている京都大学の矢守先生、それから鳥取短期大学の浅井先生のお話がございました。この2つの大学、あるいは2人の先生方のお話の共通項として非常に大きなことは、防災を窓口にした地域を知る教育と言いますか。最近、防災マップ作りとか、防災探検隊という取り組みを都市部でやられているんですけども、それは単に防災の知識を学ぶだけではなくて、それをきっかけに地域の大人たちと知り合う。あるいは大人たちに子どもを知ってもらう。そういう中で、昔な

らば「あそこのおじさんは頑固おやじだ」とか、「雷おやじだ」とか、「どこどこのおばあちゃんはすぐお菓子をくれる」とか、そういう世界が今はもうない。子どもたちの安全さえ脅かされる時代の中で、防災を切り口にして地域と知り合うという試みが両小学校で行われていたのではないかとこのように思います。実際に根雨小学校の子どもたちは、鳥取県西部地震で被災体験をした大人たちからいろんな話を取材しています。そういう中から生きた知識、あるいは共に生きていく絆の大切さ、そういうようなところに気づいたのではないかとこのように思います。それから、もう一つは京都大学のほうで地震計を子どもたちに世話をさせる、観測させるという試みをやっています。これは、今まで防災教育と言えば防災訓練ですよね。避難訓練をする。一過性で、僕らも小さい時そういうのをやって、ただただ笑って何かバタバタと終わっちゃったというような記憶がありますけど、そうじゃなくてずっと。昔、百葉箱っていうのが校庭にありましたよね。温度計とかいろんなものを観測して、係になった者が毎日毎日記録を付けていくなるとか、そういうようなことを地震計でやらせようというような試みがあります。それを見ることによって、地震ということ子どもたちが肌身を持って知るようになる。ちょっと地震計の置いてある場所から離れたところでドンドンと跳ねてみたら地震計が揺れたとか、あるいは先ほど知事のパワーポイントにも出てきましたけれども、余震がこれだけ300回も起こっている。現在もなお起こっているということをお話とかがですね。そういう教育の継続性ですね。その中から、科学嫌いをなくしていくというのが試みであったのかなというふうに思っています。黒坂小学校の取り組みは、私なりにちょっと翻訳をいたしますと、防災の知・徳・体と言いますか、知識だけではなくて徳育・体育と言います



か、技能とか、それから共に生きるボランティア精神って言いますか、助け合う、あるいは人を大切にする、敬うというそういう気持ちまで学ばせるというようなことに主眼を置いてやっていた。これも、やはり根雨小学校と同じように一過性で終わらせないというような試みであろうと思います。一つ面白かったのは、緊急地震速報ってあるんですね。緊急地震速報を使った避難訓練というのを鳥取県で初めて黒坂小学校で行われたそうであります。ちょっと、緊急地震速報ってお見せすると、こういうようなテレビに出ますよね。「どこどこで地震が起きて間もなく本震が来ますよ」というテレビで流れます。これは2008年から全国のテレビ局・ラジオ局で放送している気象庁の業務として行われるようになったわけですね。これは、簡単に理屈を言うと初期微動というのがあります、それが、本震が来るまで少し時間があるんですね。その間に、皆さんにお知らせをして「地震が来るぞ」と、備えをしようというものであります。これがだいたい5秒から15秒ぐらいの間に本震が来るという。その間にどうするか。普通は、芸予地震もそうでしたし、それから岩手・宮城内陸地震もそうだったんですが慌てるんですね、何かあると。芸予地震は、私も現場に行ったんですが、慌てて飛び出した方が隣のベランダが落ちてきて、その下敷きになってお亡くなりになったケースがあったんです。これが家の中にいたら助かっていたんですね、家は壊れていませんでした。それから、宮城内陸地震の時もクリーニング屋さんの店先だったですかね。慌てて外へ飛び出して、トラックに跳ねられちゃったというようなことがあります。そういうことに対して、緊急地震速報を使って訓練をするということは、「慌てない。冷静に判断する」ということを子どもたちに教えると。気象庁はこういうようなパンフレットを出しているんですね。

地震速報があったらブロック塀の側から離れましようとか、エレベーターに乗っていたら最寄り階で降りましようとか、こういうようなことやっているんですが。まさにそういうことを子どもたちに教えるという、新しい試みであるのかなあというふうに思います。そしてそれからもう一つは、ここでも地域の特性・連携ということを学ぼうと。先ほどの根雨小学校の聞き取りと同じように、防災マップ作りとか、それから防災カルタ、防災紙芝居。紙ぶるというのは、これは名古屋大学の福和先生が紙で耐震設計したら家がもつか、もたないかというものだと思うんですが、そういうような面白いおもちゃのような道具があるんですけども。こういうようないろんな教材を使って、学校教育を豊かにしていくというようなことが両先生とそれから両小学校から紹介をされました。問題は、先ほど室崎先生のお話の中でもありましたけれども、防災教育という時間はないんですね。学校教育の中のどこにも。だいたいはずとりの時間とか、そういうところを使ってやるわけですね。皆さん、試みていらっしゃるの理科の教育、あるいは家庭科、技術、社会科とか、いろんな中で防災教育をしていくという一般教科の中に取り入れていくという試みをなさっているのが素晴らしいのかなというふうな感じがいたしました。こういうような防災教育のご紹介があった後、日野町の日野町文化センターの向かいに日野町山村開発センターがありまして、そこへ移って公開車座座談会というのをやりました。テーマは「育てよう・災害からコミュニティを守る『地域力』」ということで、先ほど室崎先生がお話なさった内容を先に答えが出ちゃったって感じがするんですけども、これが問題編というような感じがしますね。私どもの関西学院大学災害復興制度研究所というのは、阪神・淡路大震災から10年目の2005年に創設をされました。その3年後に日本災害復



興学会というのを立ち上げました。今、大学のほうが学会の事務局をしているわけですが、当初から試みたのがこういう車座座談会とか、円卓会議とか、そういうところで全国の被災地の方々、あるいはそこで研究をなさっているの方々、あるいは実務家の方々、弁護士さんとか、それから新聞記者の方とか、そういう方々に集まっていたら、被災体験を共有しようという試みを2005年から始めています。一番左上は、ちょっとこれ見えにくくなっちゃっていますね。これは、岩手・宮城内陸地震で現場へ行かして、先ほど室崎先生のお話で出た栗駒耕英地区の人たちと一緒に車座トークというのをやった時の写真なんです。これは実際、今まさに被災されて仮設住宅にいらっしゃる方々にお出でいただいて、それから市役所からもお出でいただいて、我々が行ってどういう課題があるのか、どういうことに今困っているのか、お話を聴きながら解決策まではいきませんが、対策を考えようという試みであります。こういう円卓会議は、これは関西学院大学のほうで毎年やっておりまして、あまり好ましいことではないんですが、被災地が毎年毎年増えていくので、参加者もだんだん増えていって、発言が一通りを終わると3時間ぐらいかかってしまう。なかなか議論が深められないという悩みを持ちだしまして、今年から年度の途中で現場のどこか1箇所を選んで、被災地へ出掛けて行ってそのテーマについて掘り下げようという試みをしようということになりました。それで、鳥取県西部地震10年で、ここぞ当地にお邪魔をしたというわけです。日野町には日野ボランティアネットワークの山下さんとか、我々の仲間がいますので、そういう意味でも非常にいろんな勉強になったと。実は、片山前知事は復興学会の顧問にもなっていて、浅からぬ因縁と言いましょうか。要するに現研融合というのは、

現場の活動と研究を融合しようという取り組みですね。それから文理融合というのは、社会科学と自然科学・応用科学を融合しよう。どうしてもどちらかだけに偏りがちなので、そこを一堂に会して少しずつ価値観とか物差しが違うわけでありまして、そこを共有していろんな防災とか復興を考えようという試みであります。昨日の出席者を少しご紹介いたしますと、鳥取県側からは日野町の景山町長さん。それから鳥取大学の谷本先生。鳥取短期大学の浅井先生。鳥取県建築士会会長森本さん。地震の当時は県の課長さんだったそうあります。いわゆる住宅再建支援に知恵を出されたお一人だというふう聞いております。それから、日野ボランティアネットワークの山下さん。鳥取県防災監の大場さん。という6人の方に鳥取県側からは円卓に座っていただきました。それから、我々のほうからはこれだけ円卓に座りましたのでちょっと全部はご紹介できないのですが、いろんな被災地からおいでいただいていますし、職業も様々であります。大学の先生が一番多いんですが、NPOの方、それから自治体、兵庫県の方ですね。それから離島三宅島からも来てもらいました。それから、まだ被災していない徳島県三好郡東みよし町の自治会長さんにも来ていただきました。それは何故かというのは後でお話をいたします。ざっと内訳を見ますと、こういうような感じですね。学生さんというのは足湯隊というボランティアの活動があるんですけど、その学生さん、神戸大学の人に来てもらいました。都道府県も8都県に跨っていると。やっぱり防災とか復興となると女性がちょっと少ないんですが女性も呼んで、昼からお一人登壇をされます。話し合ったテーマとしては、やはり鳥取県西部地震を基本において話し合いましたので、一つは「人こそインフラである」という、鳥取県西部地震の復興政策で行われた大きなテーマの一つだと思うん





ですが、人こそインフラであるということ。それから、住まいの支援こそ心の支援であったということですね。とはいえ、自治体の財政負担は大きな課題で、これは日野町の問題、先ほど知事がお触れになりましたけれども、これは日野町だけの問題ではなくて、被災自治体全部が抱えている大きな課題であります。これは、復興だけではなくて防災にも非常にお金が掛かる。これは、昼から登壇される新潟県の泉田知事もおっしゃっていますけれども、復旧には国からお金が出るんですが、防災と復興にはお金が出ないと。これが非常に自治体にとっては頭の痛いところであります。そして、中山間地の復興と言いますか、先ほど減災に繋がるメリットというふうな室崎先生はお話をなさいましたが、復興に繋がるメリットって何なのか。外部支援というのはどういうものなのかというふうなお話を中心に、最終的には中山間地の活性化対策ということを話し合いました。我々がやっぱり関心が高かったのは鳥取県の住宅再建支援ですね。要するに、阪神・淡路大震災では住まいこそその地域の復興に繋がるものだと言われながら、何ら手立てがなかったということで、当時の知事の貝原俊民さんが先頭に立って非常に珍しかったと思うんですけども、全労災とか、連合とか、市民生協とか、いろんなところと連携して、全国2,400万人の署名を集めて住宅再建を訴えられるというような場面もあったわけですね。作家の小田実さんは、これが日本の国かという非常に過激な本を出されて、住宅再建支援の必要性を訴えられた。それを受けてこの鳥取県西部地震で風穴を開けられたのが、鳥取県独自の住宅再建支援策であったのかなというふうに思うわけです。とはいえ、この住宅再建支援策はここでは地域を守る、コミュニティを守る。そこへ住宅を再建しなければいけないんだという理屈で、国の「住宅再建は私有財産への支援である。それはいけない」

という論理に対抗したわけですね。しかし、根源的なところでは解決されずに一つの風穴は開けたんですが、そのまま次の課題へと移って行って新潟県の中越地震、能登半島地震へと移っていくわけですね。そこで、初めて現行の住宅再建支援策ができて300万円が国のほうも支援するというふうな、10数年にわたる論争の結果、そういうものが実現されたということで非常に大きなエポックメイキングな地震であったというふうに思います。そのへんの問題を一つ考えようと。一方で、とはいえやはり集落は縮むんですね。日野町長のお話をお聴きすると、この住宅再建支援策で2年間は過疎が止まったと。人口流出が止まったとおっしゃっている。しかし、復興宣言をした途端、人口減が進んでいってしまった。これはもちろん人口流出だけではなくて、やっぱり過疎化という逃れられない問題が大きくなると思うんですね。その車座座談会に座っていただいた新潟県中越地震の昼から登壇される稲垣さんのお話によれば、新潟県中越地震では2つの施策が行われたんですね。一つは「帰ろう山古志へ」という合言葉で、映画を皆さん見られたかかもしれませんが、「マリと子犬たちの物語」っていうのがありましたけれども。今、衆議院議員になられた長島村長さんが「帰ろう山古志へ」ということで山へ帰るという方針を据えているような施策を行う。その象徴的な施策が、小規模住宅地区改良事業というものだったんですね。これは、行政が土地を買い上げてそこに公営住宅を造ったり、あるいは分譲していくという形で元の場所へ人々が帰れるような施策。もう一つ、隣の小千谷市がやったのが、防災集団移転事業。この危ない中山間地からは全部住民を降ろそうというような形で集団移転を試みたわけですね。しかし、半分ぐらいの人が残っちゃうという中で村が割かれたということで当時地元の新聞、新潟日報なんかにも大きく書かれ



ましたけれども。今になってみたらどうかという
と、どっちも人口5割減になっているというんで
すね。なかなかどういう施策をとっても過疎化
の波は食い止められないという問題が新潟から提
起をされました。それから、三宅島。伊豆七島の
ある三宅島です。この島の象徴である雄山が
2000年、鳥取県西部地震と同じ年に噴火をして
います。そこの人たち、全島民が4年半に渡って
本土に避難をするわけですね。この人たちが5年
前に全島帰還をするわけですけど、全部帰らない
んです。帰ったのが7割ぐらいだったというふう
に言われています。そこの出身の宮下さんって
方にお話をお聞きしたんですけど、要するに
仕事の問題、それから子どもの教育の問題。本土
に行っちゃってそこで子どもが教育を受け、母親
が仕事に就いてしまうということで、帰らない人
が出てくるという問題が出ました。いろいろなお
話の中から復興への道筋としては医・職・習・住。
医療ですね。それから職業、仕事ですね。それか
ら習というのは学習、教育ですね。それから住と
いうのは住まい。こういう4要素がうまく揃わな
いとなかなか復興できないという話にはなっただ
けですけども。とはいえ、やっぱりそれでも過疎化
が食い止められないんです。この問題は非常に
深刻であります。それと同時に先ほど室崎先生
のお話でも出ましたが、単発の支援ではちょっと難
しいですね。村全体を守る、地域全体を守る。
あるいは生活全体を守るとなると、一つの住宅再
建支援、一つの何らかの融資というだけではな
かなかうまくいかない。その中でどういうふうにし
ていくか。生業支援とか、あるいは産業支援とか、
それから広域合併をしますね。いろんな広域合併
をして、被災地が非常に少数者になってしまう。
そこに対する支援がなかなかうまくいかないと
か、いろんな問題が提起されました。もう一つは、
今の住宅再建支援が300万円になったんですけ

れども、逆に被災者生活再建支援と言いながら住
宅のみに偏ってしまう。暮らしへの支援がどこか
へいってしまったという中で、これ大規模半壊以
上なんです。支援が受けられるのは。そうする
と、一部損壊の人、半壊の人、それから長期避難
の人がなかなか支援の対象とならない。長期とい
うのは一部お金が出るんですが、これは帰らない
ということが条件になっています。帰る人には出
ないですね。そういうような問題をどういうふう
にしていくのか。逆に濃密なコミュニティの中
では「貰った」、「貰わない」、「いくらの額か」、「こ
ちらは少額だ」ということで、そこにコミュニ
ティの亀裂が入っていくというような事態も起
こってきているわけです。山古志の長島村長がおっ
しゃっていましたけれども、「私は、住民一人一
人のタバコの銘柄まで知っているよ」というよう
な濃密な社会で、こういうお金が下りてくるわけ
ですね。そうするとその中でいくら貰ったかすぐ
分かってしまう。という中でどうやって違う形の
互助、あるいは共助を形作っていくかっていうの
が、大きな課題だろうということが指摘をされま
した。それと同時にお金がないという問題ですね。
日野町が一時財政再建に陥りかけたという問題。
ここのところをどうするか、これがなかなかいい
知恵が出ないんです。今までのいろんなアイディ
アが出ています。特別目的税。それは近隣の自治
体で一つの災害に対応するための特別目的税を取
ろうとか。あるいは特別交付税というのがありま
すね。これを、一部をファンドとして積み立てて
いこうとか。それから、輪島の市長は市町村全体
でファンドを創ろうというような提案もしてい
らっしゃいました。それから、我々は復興交付金
というのを提案しています。いろんな事業に使
えるように。これだけではなくていろいろな事業に
使える。それから、年度間である程度流用でき
るようなものにしようとか。あるいは、復興基金つ



ていうがあるのですが、これは雲仙普賢岳噴火災害からですね。自由になるお金っていうのが積み立てられて、議会の承認を経ずに出せるというようなシステムがあるんですけど。こういうようないろいろ提案はあるんですが、いずれも最後はお金をどうするかという問題に突きあたるんですね。財政学の徳島大の先生からやっぱり目的に応じた手立てを考えるべきだと。誰が一体負担するのかと。日野町民なのか、鳥取県民なのか、日本国民なのか。それから、過去の人なのか、今の人の人なのか、未来の人なのか。これは税金とか、あるいは債権とか、いろんな形で将来負担とか、過去のお金を使うとか、いろいろありますね。そういうようなことを目的に応じて考えていく必要があるのではないかという提起がありました。それから、中山間地問題。先ほど室崎先生のお話でもありましたけど、中山間地の災害に対する耐える力、地域力が落ちてきているという中でどうするかという問題ですね。日野町長からは、これからの日本のありようを示す素晴らしいところが地方だという提起をしていく必要があると。「大都市には未来がない」というご提案があった一方、「うんと勉強してこの中山間地から出て行きや」というような教育も現実にはあるという。現実論と理想論の対立がありました。それから、いわゆる中山間地問題まで議論を広げることは防災や復興の焦点が拡散してしまうのではないかと。そこまで我々が議論すべきではないのではないかとご意見。しかし、その不均衡な国土に目を向けなければ、防災も復興も語れないという議論。こういう対立点が解消されないまま2つの意見として出されたまま今日に至ったわけですね。これが、佐用町の水害です。先ほど知事のお話でも出しましたが、20人から亡くなった佐用町水害ですね。こちらは、地元の神戸新聞の記事ですけれども、この僅かな水路に8人の家族がのまれちゃ

ったわけですね。向こうに公営住宅があって、こちらの手前に学校があるんですが、その避難所へ行く間にここへ吸い込まれるようにして亡くなってしまった。その避難指示が遅かったのではないかなというように今裁判だとか、いろいろ議論はされていますけど、一方で向こうの写真を見ていただいたら分かるんですが、これは私が撮った写真なんですけども、上流に行くと山林がこうやって山体崩壊と言うか地滑りを起こしているんですね。それは、先ほど室崎先生のおっしゃった林業が行われていない。ただ、これは東京大学の倉橋先生の論文をちょっと借用しているんですけど、上は東海道五十三次の絵なんですけど、ほとんどはげ山だということですね。この戦前の写真ですが、これもはげ山だと。日本の山は今は凄く豊かだということですね。豊かなんだけど伐採、間伐というのがなされていないので、これ向こう側が手入れをされていない林。こちらは手入れをされた林。こういうふうに陽が入るところと入らないところができて、陽の入らないところが全部地滑りを起こしているというようなことが指摘をされて、こういうふうに山が衰退してきているわけですね。こういう問題は、産業構造の変化自体を何とかしなければいけないわけなんですけども、これがまたなかなか容易ではないという大きな問題に突き当たってしまうわけです。とはいえ、そういう国土全体の問題とは別に我々は被災地の中でどうやって活性化していくかという問題も考えなければいけない。これは、実は足湯隊とって神戸や新潟の学生さんが被災地へ出かけて行って、こういう温湯の中に足を被災者の人に入れてもらって手を揉みながら呟きを聞くと。いろんな愚痴もお聞きするというようなボランティアなんです。これは全部若者たちが自発的にやっているわけですけれども、被災地で生まれた言葉に「よそ者・若者・ばか者」という言葉がある



んですね。こういう人たちが一つ復興の起爆剤になるのではないか。その地域にある良さに、皆さん住んでいらっしゃる方は気づかない。それに気づくのがよそ者であると。そういうことにムキになって、損得なしでやる若者がそういう復興の担い手になっていくんだろうと。もちろん、日野町でも山下さんとかいろんな方が出ていらっしゃる。それから、やっぱり若い人っていうのが大きいですね。我々みたいな高齢者ばかりに日本全体がなろうとしているわけですけども、そこに若い人たちが入って来るのは一つのエネルギーになっている。そういう意味で足湯隊っていうのは非常に一つの面白い将来を覗くようなものなのかなあと考えています。奈良の斑鳩の里の景観保存に力を貸した幸田露伴の娘さんが、「よそ者こそ地域の良さに気づくんだ」という言葉を残しています。それから、都市性と田舎性のコラボレーション。これは、湯布院なんかがそうですね。復興までの原動力になるのはこういう人たちではないか。ここに僕たちは少し明日の未来を感じることができないかというふうに思っています。それから、これは先ほどなぜ被災地でない東みよし町の人に車座座談会に加わっていただいたのかというと、上の原っぱとここの廃屋のような古い家。これは皆さん見ただけで分からないと思いますが、下は農村舞台になる古民家なんですね。阿波ですから人形浄瑠璃をやります。こういうものを地域の人たちが守っているんですね。ここに年に1回、間もなく10月10日に皆さん集まってここでいろんなサポーターが来て農村舞台を楽しむというものです。上は、法市地区の区長さんが自分の山を全部切り開いて。これは何のために切り開いたと思われます？ヘリコプター基地なんですね。防災ヘリコプター。いざとなった時に助けにきてもらう。この2つが1つのセットにならなきゃいけないですね。こちらで助けても

らえる村づくり。かけがえのない村をつくって、だからこそ助けてもらう。それは自力で助けてもらうという非常に面白い試みなんですね。東海・東南海・南海地震のような大規模な広域災害が起こればきっと大きなところには支援が入るでしょうけども、こういう中山間地の小さな孤立集落にはなかなか支援の手が入らない。復興のトリアージが起こってしまう。トリアージというのは、助けられる人から助けていくという考え方ですね。そういうものが起こる。そのために、助けられる村をつくらう。それが地域の活性化でもあるわけですね。防災とか復興を切り口にしていますけども、地域活性化の一つの手段である。そこにいろんな人がやって来ますし、我が大学の学生さんたちも随分ここの農村舞台には見学に行ったりしていますね。そういうような一つの試みで、一つの参考になるのかなあとということでお見せをしたわけです。最後に、室崎先生が結論を導かれていたようなお話になるんですが、中山間地をどうしていったらいいのかと。同じように20世紀から21世紀初頭にかけての高度経済成長と同じやり方では駄目だろうと。大都市のやり方では駄目だと。分業から兼業へと。それから、縦割りをまとめる。兼ねるという役割を一人がいくつもやる。あるいは先ほどの知事の見守りというのがあったですね。ああいうふうにいるんな仕事をしている人がほかの仕事も兼ねていくというような試みがあるのではないかと。それから、全員が共生する。任せると、誰かに。行政にお任せするとか。あるいは、仕事はどこの会社にお任せするのではなくて全員がやるんだと。担うんだと。それは子供たちにとって尊敬する大人を見るということでもある。そういうような共生の社会を創らなければいけないと。ということは誰もが必要とされる社会。鳥取県西部地震の時、私、日野町に入って80ぐらいのおじいちゃんとお話をしたんですけ





ども、そのおじいちゃんが境港の息子の家から元へ戻ってきたのは「私はこの町内会の班長をやっている」と。「私が帰らなあかんだ」という誇りを持っておっしゃった。それはいろんな集落のしがらみとか、いろんなものもあるでしょうけども、まさにそういう誇りですね。自分が必要とされている社会。そういうものを創らなければいけないと。それから、先ほど鞍馬の火祭の話が出ましたけれども、伝統的な民俗学的な仕掛けの中に防災とか、復興の鍵があるんじゃないか。それを全国から拾い出して、今ふうアレンジして提示しようという研究も今、国の研究費を取って始めているんです。そういうこともやらなければいけない。そうやって地方が変わっていけば、都市が変わるだろうと。都市が変われば、日本が変わるのではないかというようなところで議論が、一応時間が来ました。その話を受けて、今日は昼から非常に掘り下げた議論が交わされるんだろうというふう期待をしていて、私も何らかの答えが見つければいいなあというふうに思っています。ということで、昨日の報告を終わります。ありがとうございました。

たします。

(終わり)

○ 司会

ありがとうございました。皆様、山中教授様に今一度盛大な拍手をお願いいたします。それでは、ここで休憩とさせていただきます。午後からのパネルディスカッションの開始時刻は1時です。5分前にはご着席いただきますようお願いいたします。なお、12時20分から50分まで「平成12年鳥取県西部地震の記録」と題した映像ビデオを当会場で流します。また、ホールホワイエ1階、2階では鳥取県西部地震のパネル展示を実施しておりますので、よろしければご覧いただきたいと存じます。また、会場内、客席・ロビーでの飲食は禁止となっておりますので、よろしくお願